



2026 年 2 月 16 日
公益社団法人日本建築家協会
表彰委員会

2025 年度第 37 回 JIA 新人賞 決定のお知らせ

2025 年度第 37 回 JIA 新人賞受賞者をお知らせいたします。受賞者詳細は、添付書面にてご確認下さい。

受賞者	所属	作品名
畝森泰行	畝森泰行建築設計事務所	父子の家
原田将史・谷口真依子	ニジアーキテクト一級建築士事務所	段庭の家

(応募登録順)

※2025 年度 JIA 新人賞は、2020 年 1 月 1 日より 2024 年 12 月末日（5 ヶ年）までに日本国内で竣工した建築作品を対象とし、審査が行われました。

・審査委員

坂本一成氏、石田敏明氏、原田麻魚氏

・実施状況につきまして

2025 年 9 月 5 日（金）	応募締切
2025 年 10 月 23 日（木）	第 1 次審査会にて応募作品 95 点の中から 12 点を選出。
2025 年 11 月 13 日（木）	第 2 次審査会（WEB 配信による公開審査）にて候補者によるプレゼンテーション及び質疑応答を行い、現地審査対象作品 4 点を選出。
2026 年 1 月～2 月	現地審査実施。
2026 年 2 月 6 日（金）	最終協議を経て、上記受賞者を決定。

父子の家（ふしのいえ）

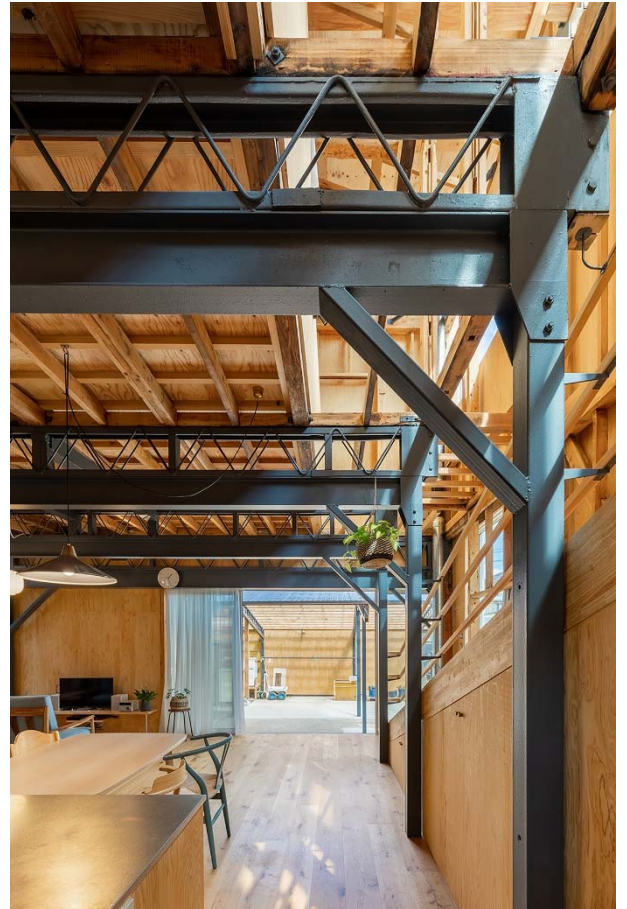
畝森泰行（うねもり ひろゆき） / 畝森泰行建築設計事務所



1979年 岡山県生まれ
2005年 横浜国立大学大学院修士課程修了
2002年 西沢大良建築設計事務所勤務（－2009年）
2009年 畝森泰行建築設計事務所設立



撮影：Atelier Vincent Hecht



撮影：Atelier Vincent Hecht

改修と新築を混ぜたようなプロジェクトである。新旧の民家が混在する郊外住宅地のなかに敷地はあり、そこには大工だった建主の父が生前に施工した母屋やハナレ、作業場、倉庫などが建っていた。これらは少なくとも4回以上の増改築がなされており、そのうちのハナレと作業場を、息子である建主家族の住宅に変えること、また母の住む母屋と適度な距離を保ちつつ、これまでの流れを引き継ぐ計画を求められた。

既存のハナレは、木とスチールによる複雑なつくり方をしていた。その複雑さを維持するように、既存の骨組や基礎を残しながら、新しく木造の屋根と外壁で覆い、床や水廻りを加えている。新設部分として自立させつつも、既存部分にわずかに力を預け、また既存と新設のあいだに小さな隙間のような空間を生むことで、大きく開けた窓から、古びた柱や梁、垂木などを通して光と風を取り入れる。そうした新旧が対立せず、互いを補い合いながら混在する住宅を目指した。

既存の建物はいわゆる合理的な建築ではなかった。しかし「その時にあったもので」、また「思うままに」つくられたそれらには、ものづくりに向かう本質的な自由が感じられた。その創造性のなかに、建主の父との見えない対話を通じて、私たちもまた参加する。それは時間を超えた協働であり、複数の主体によって生まれる建築でもある。そうした他者や時間が折り重なる豊かさを、建築として現したいと考えた。（畝森泰行）

段庭の家（だんにわのいえ）

原田将史（はらだ まさふみ）＋谷口真依子（たにぐち まいこ）／ ニジアーキテクトゥー級建築士事務所



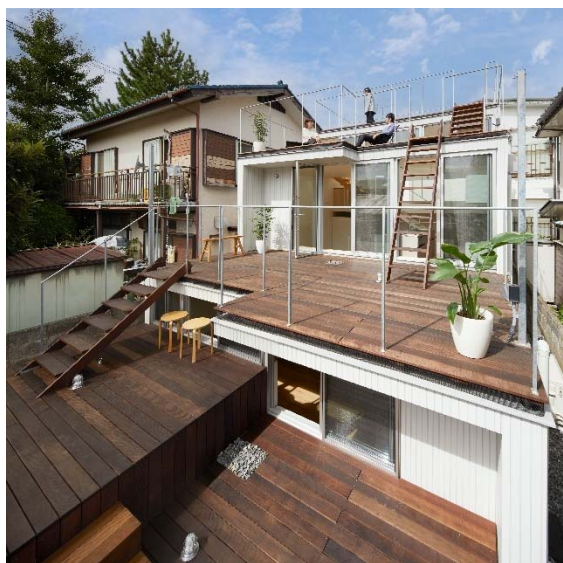
原田将史（はらだ まさふみ）

1977 年 東京都生まれ
2002 年 武蔵野美術大学造形学部建築学科卒
2002 年～2012 年 手塚建築研究所勤務
2012 年 Niji Architects 設立
2014 年 Niji Architects 一級建築士事務所共同設立
2014 年～ 日本工業大学非常勤講師
2015 年～2016 年 武蔵野美術大学非常勤講師
2016 年～ 東京都立新宿高等学校キャリアガイダンス講師
2019 年 ニジアーキテクトゥー級建築士事務所に改称
2025 年～ 工学院大学非常勤講師



谷口真依子（たにぐち まいこ）

1978 年 兵庫県生まれ
2001 年 武庫川女子大学文学部英米文学科卒業
2001 年 積水ハウス建設勤務
2007 年 菅匡史建築研究所勤務
2009 年 アトリエ・天工人勤務
2010 年 椎名英三建築設計事務所勤務
2014 年 Niji Architects 一級建築士事務所共同設立
2015 年～ 株式会社家根源・取締役
2019 年 ニジアーキテクトゥー級建築士事務所に改称
2025 年～ 大阪電気通信大学非常勤講師



撮影：Kazuhisa_Ishikawa



撮影：Kazuhisa_Ishikawa

いつでも敷地全体で陽の光を目一杯浴びることができる家を作りたいと考えた。

敷地は都内住宅密集地の袋小路最奥部に位置している。接道わずか2mの旗竿地で、敷地面積も小さく建蔽率・容積率も厳しい。周囲は家が建て込んでいるため、斜線最大ボリュームで建物を作っても、採光や通風は期待できず、残った南側の庭も狭く暗くなりかねない。そこで、陽の光を全身で受けられるよう、床面積は最大限確保しつつ北側上空に向かって徐々にセットバックしていく階段状のボリュームとし、南側に立体的なボイドを生み出した。

外構と全ての屋根の上にウッドデッキを敷き詰めることで、ウッドデッキのテラスは段々の丘のようにレベルを変えながら最上段の屋上まで連なっている。ハイキングをするように登り3段目のテラスから室内空間へと直接アプローチをする。一般的な独立した玄関空間を持たず、各段に間口いっぱいの開口部がある為、どこからでもアクセスが可能となっている。外部テラスの床よりも内部空間の床を低く設定することで、外部からの程よい奥まった空間を作りだしている。下層に行くほどに外部との関係が遠く、逆に上層に行くほどに外部の支配率が高まり、グラデーションのかかった空間の変化が限られた床面積の中でも様々な居場所の選択性を住人に与えている。

家全体で受けた陽の光は、内外の段々状の床の隙間から下層まで降り注ぐ。アプローチから連なる全てのテラスはそれぞれ室内の延長として過ごすための場所となり、床面積を超えて無限の広がりを感じる。

テラスと屋内の床は等価に存在し合い、敷地全体に存在する段が庭となり家となる。（原田将史＋谷口真依子）